

コメント（田中）

読書人・大平の風格

大平さんを知る多くの友人は、同氏が政界まれにみる読書家であることを、一様に称揚してやまない。大蔵省の先輩であり、政治家としてもまた大平さんの先を歩んだ前尾繁三郎氏の読書家ぶりについては、つとに有名だが、おそらく、大平さんの読書に注ぐ情熱も、前尾氏のそれに劣らぬものがあるのではないか。

大平さんは『私と読書』と題する短文で、つぎのような感想を書きつづけている。「私はどんなに忙しくても、毎週一度や二度は、最寄りの本屋に立寄ることになっている。そしてたいていの場合、二、三冊の新刊書を求めて帰ることにしている。本屋の書架で、私の足を止めさせるところは、政治、経済、法律とかがいてあるところというよりは、むしろ歴史、社会、随筆等の書架である。そこに毎週、新たに持ち込まれる新刊書の新鮮な香りと、それを手にした柔らかい触覚はたまらなくうれしいものである。生きる悦びを味わう瞬間である。」

日本人の本よりは、どうしたものが、訳本の方が読み応えのする本が多いように思う。構想の雄大さ、方法論の雄渾さ、引例の豊富さ、タッチの勢い等において、西欧ものの方がすぐれているものが多いように思えてならない。それは欧米人が自ら築きあげた欧米文化に誇りと自信をもっているせいではないかと考えられる。中国の古典も、欧米のそれとは全く異質のものではあるが、われわれの肺肝を打つ力をもっている。中国人固有の思想が大胆に吐露されて、迫真の魅力を持っている。それに比して、日本人のものには、この東西両文明の流れのいずれかに沿って、よくいえば、その忠実な紹介、悪くいえばその模倣という域を、まだ十分には抜けでていない憾みがある。真に日本的なもの、われわれが誇りと自信をもち得る固有な日本思想は、いったい何かという課題は、政治においても、経済においても、さらにはより深く文化の世界においても、発掘され確立されていない現況である。この苦悶は、日本人に根深い焦燥心をかり立てているとみえて、日本ほど刊行物の多い国はない。新刊書籍は、ままた汗牛充棟、応接にいとまがないほどである。

そこで私は、近來切実に考えていることは、乱読を慎もうではないか、ということ

である。洋の東西を問わず歴史の風雪に耐えて、しかも依然強い光彩と生命力を放つ少数の書籍を、自分の実生活の伴侶として、よく読み、よく消化し、よく実践するという生き方をとらない限り、われわれの精神の渴きは癒すべくもないのではないか」

大平さんの対談は、スローテンポで有名である。瞑目したまま、「アー」とか「ウー」としばらく絶句し、やがて、おもむろに口を開く、決して能弁ではない。だが、あの絶句は、言葉を一語一語選ぶための間といえよう。選ばれた言葉に明晰な思考を託す、大平さんの話しっぷりには、そんな感じがする。読書人の面目躍如たるものがあるといえよう。

政治家にとって、読書人たることは必ずしもプラスばかりとはいえない。ワンマンの吉田茂は趣味をきかれても、決して読書とはいわなかった。それはゴルフや読書が、趣味のカテゴリーに入らないという意味ではない。英国紳士にとって必要な教養とは、スポーツであり、ハンティングであり、決して読書ではないという。書物の虫は、紳士たるもの、指導者たるものにとって、かえってマイナスとみられたためであろうか。

しかし書を読み、深く知り、考え抜くことは、憂い多きことではあろうが、人間に

深みと風格を与えてやまない。読書人の政治家を一国のリーダーに持つことは、国民にとって決して悪いことではなからう。

精神形成と学生時代

大平さんの精神形成史で、逸することができないのは、聖書とのめぐり合いである。この対話の中でも、マルキシズムの影響を受けなかった理由として、すでに聖書に深く傾倒していた点をあげている。「マルクスよりキリストの方が偉いもの」と答えている。

大平さんがキリスト教と出会ったのは、高松高商に入学して間もない頃であった。当時、工学博士の佐藤定吉氏が来高して、「科学と宗教」というテーマで講演した。佐藤博士は東北大学の教授をやめてから、「イエスの僕会」という学生団体を全国的に組織して、科学を通してみたキリストの伝道に専念していた。大平さんにとって、キリスト教は全く無縁の世界であった。ところが、どうしたものか、佐藤博士の話に

感動し、夢中になってしまった。やがて同志とともに東京や高松の街頭に立って、信仰の告白をするようになった。

大平さんはいう。「しかし佐藤博士の所説は、われわれに神に対する畏れの念を植えつけるには役立つたが、その神が何故、愛であるかについては、どうしても納得がゆくものではなかった。そのためには、キリスト教の教えをまたねばならなかった。したがって僕会の人々も、その後キリスト者としての道を歩んだ人が多く、博士の科学と宗教についての論説は、キリスト教への呼び水の役割を果たしたものだ」

大平さんも、聖書を通してキリスト教に進んだ。内村鑑三をはじめ、その門下の塚本虎二、黒崎幸吉、江原万里といった人々の著作に親しみ、大学に進学してからは、矢内原忠雄の「聖書研究会」にも参加し、直接教えを受けた。また、そのころ東松原の自宅で聖書の講義をしていた、賀川豊彦のところにも出向いて聴講したりした。

マルキシズムについては、はじめから深く立入る機縁がなかったと言っている。

大平さんは一橋大学出身だが、母校を評して、ユニークな学園であり、日本の一つの文化財と述べている。東大と一橋を対比して「東大は一つの大きな社会、一橋は一

つのファミリ―」ともいい、それぞれ一長一短あるが、一橋のような学校が一つあってもいいのではないかと、母校の存在意義を強調する。

大平さんは母校の出身者に非常に助けられたといつて感謝する。「一橋からはいただくばかりで、あまり奉仕していない」といつて恐縮する。

『私の履歴書』の中でも、『一橋ファミリ―の情愛』と題するつぎの一文をものしている。

「明治四十三年の卒業生名簿の中に、加藤藤太郎氏の名がみえる。加藤さんは、私と同じ中学の第二回の卒業生（私は二十四回）で今年九十歳であるが、きわめて健康であられる。一橋卒業後、王子製紙に入社され、終戦時は副社長であつたが、追放令にあい王子を退かれた。その後、王子の神崎工場を再建し、『神崎製紙』を創立された方である。学生時代から、私はよく日比谷の三信ビルにあつた王子製紙に加藤先輩を訪ね、学生県人会の寄付などをお願いし、いつも予期以上の協力を受けたことを感謝をこめて思い出している。

私の今日あるのは、もちろん多くの先輩友人の友情と支援に負つたところであるが、

とりわけこの加藤先輩をはじめ、磯野長蔵、菅礼之助、本田弘敏、小泉幸久、高橋朝次郎、田中外次、松本正雄、宮崎一雄、近藤淳氏ら、同学の諸先輩の愛顧に負うところが大きい」

いまでも大平さんにとって、社会科学のメッカである母校一橋は、聖書とともに心の郷里のようである。